

めちり

賢人の朝より其心を眞神と捧げて其身を神前に置き眞神と己が意思を隠しことあり

欲せば人汝と與へん求めば汝之を得ん叩かば人汝と聞さんと眞神の汝が所望を遂げ得しめんこと斯の如く恭敬を盡して禮拜せば其至誠眞神を感格せしめんと必せり

汝眞神を禮拜するふ多言を用ゐることあかき多言ハ果して何の用をあさん眞神ハ汝が祈願せざる前已に汝が望みの肝要あることを知せり只左の如く云ふべし我真

神在天の靈誠と至妙至聖にして瀆せ近づくべきことあらぬども敢て誠信を尽し謹みて衷情を訴ふ今より後世事如何と轉遷せとも宇宙如何と變動せとも其意ハ天平等しく余輩をして日と衣食と窮せしむることあく又我が人の無禮を宥恕せざる如く眞神も亦余輩の無禮を寛恕し給ひ余輩をして惡しき事と疑せしむることあく且余輩の災害を救ひ給へと

真神を禮拜せると窮民を周恤せるとハ其功財寶を積むよりも貴し
汝若し惡事をあさば眞神を尊拜せとも益あつるべし眞

神ハ實ニ汝を嫌ヒ避け給はん
汝ハ汝が心を正しくして惡念を消し不徳を避け勉めて
善をよし正直を常とし飢寒の者を周恤し孤子寡婦を保
存せべし如此して眞神を尊拜せば眞神ニ對して耻ると
とあかるべし

第九章

眞神ハ善人を佑くる事

惡人の幸福を羨むことあられ又其富貴を嫉むことあ
れ惡人の野草の如く野花の如し縱令一度ハ繁榮せども
終ニハ枯落を免かれざればあり
望みを眞神ニ掛けて勉め善をなさば土地を有ちて世

の富豪となることあるべし

余輩の幸福を願ふニ總て之を眞神ニ依頼し謹みて神
前ニ祈念せば其願ふ所の事を成さしめ給ふべし
惡人の志を得ることありとも長く世ニ存せざるべし其
居所速ニ湮滅して尋ねとも之を見ざるに至るべし
心清淨なる人ハ其身安全を得べし
惡人ハ善人ニ向ひ怒りて刀を抜き兵を構へ小弱を凌ぎ
無罪戕劫さんと欲ほとも其刀ハ却りて己が身ニ當り其
兵ハ己が手中ニ折せん徳ハ小なりとも惡人の財を有せ
るよりも甚貴かるべし眞神ハ惡人を退け善人を見て之

きを佑くせりなり
余既に老大にして世を閑むること久しけども未だ曾て善人の廢てらるること或見ぞ其子の世に惡まることを聞きぞ
世間に眞神を信奉せざる人あり余嘗て其人の一度安逸尊榮なることを見たり恰も山にセードル松の一種が如くなりしが少時を過ぐるのこゝろて其人と居と今既に滅没して得て尋ねがたし嗚呼哀哉
眞神に正人の安全を授け且之を依けて其補翼となるへし是れ正人の其望みを眞神に依頼するが故なり

第十章

良心

心の惡を惡み善を好むものなり故に善をなし惡を去るを養心の要といはるるなり
何を善と云ひ何を惡と云ふ童子等善惡を判決するに其身あり故に自善惡を審知して之を判決せんことを務むべし
惡をなす人其心紛擾して羞耻多く人を見て赧然たり亦多く昭々の地明々の時を避けて竟に其身を隠はるに至る是れ其行の理ふ悖り義に反して自其事の愧づべきを知るに因りてあり

善をなす人ハ其心常ニ安寧ニして人ニ對して慚る色
なし是れ其行の理ニ循ひ自心の明白ニして其善道を知
るニ因るなり
各人一の感覺あり即ち前ニ示すが如く事の善惡を判知
する事ニて此感覺を良心と云ふなり
惡人の心ハ人の譽る時は至りて自愧ること多し是れ其
心の其人を罰するなり善人の心ハ人の之を毀るとも自
一點の愧づべきことなきを知る是れ其心の人を恕する
なり

良心ハ即ち眞神の聲ニて余輩をして事理を了解せしむ

る所以のものなり

第十章 後悔

惡人の喜ぶ誠信せむることふかれ口ニ微笑せむと見ゆると
きは其心ニ毒あり
一種傷むべき人あり専ら詐偽誣罔を以て其身を富貴ニ
し廣慶細蠶ニ居り錦衣玉食して甚華美を極む汝等之を
見て其人の眞幸福なりと思ふや恐らくハ然らざるべく
其人ハ自此富貴の惡業より成ざるを知るがゆゑニ絶之
て囚人の牢獄ニ拘繫せらるゝて日々ニ其鎖鑰の響き門栓
の音を聞くが如く心ニ苦しく思ふなり然らば恰も獄中

よおきて命送る者と同じからん
或る人嘗て真神に對して罪科を犯ししが他人の之を知
る者あり然るに此人常に他人の接遇する毎に其罪案を
讀まるとか如く思へり一日此人慘酷に未だ巢を離れざ
る雛鳥を殺したり傍人之を見て責めて云く汝ハ何故に
斯る殘忍なることをせむやと其人驚き慌惚として答へ
て云く汝ハ今聞かば此鳥我を吾が親を殺したりと云
へりと既に始めて始めて悔悟し自條理の亂ししことを知
り其後恐懼戒慎して改心せり

後悔ハ犯罪の最恐るべき第一の天罰にして此罪ハ決し

て免るゝことなし

汝等人と逢ふことを避くとも已が目まで已を見ざるこ
と能はざらん後悔ハ罪を謝する中にて甚恐るべきもの
なり是れ心の病ハ體の病より甚苦しきと同じ理なり

第十二章

貧人ルウ井

某の村の卑小なる茅舎に住居せるルウ井と云人あり此
人甚貧し多きども耕耘を業として四人の小兒を養へり
朝ハ日出より田より出て身屈曲け汗を流して耕作をま
夕ハ太陽の地平線に隠るゝに至り鋤を荷ひて家へ歸り
四人の小兒を抱きて其膝の上へ居らしめ小歌を誦ひて

游戲せしめ其後共々粗製の麩包を食ひ其味ハ殊々淡薄
きども其人善心ありは之を美味とせり

此四人の小兒を養ふハ極めて艱苦あり其故ハ此小兒ハ
己が爲め父の稼きたる衣食を何とも思えざればあり
然れどもルウ井ハ之を憂へず其心満足して常に樂しき
容子あり

ルウ井の睡し就く時ハ實に正人の眞神の兩腕中ニ安眠
するが如く曾て驚動することあり

祭日ハルウ井ハ其妻と兒とを携へ寺院に詣て眞神
を拜禮し歸途ふハ大樹の蔭に坐して其兒の草野に游戲

するを見て喜へり

ルウ井ハ斯く恬然として富貴貧賤の爲め其心を動さ
ず憂苦もあく亦明日の慮もあく泰然として其生涯を過
したり

ルウ井の眞神を拜する語の中ニ我眞神を絶えぞ我身を
して健康無病ならしめ給へ是れ余が兩腕ハ即ち余が兒
子の麩包なきばかりと云へりルウ井の眞神に祈るハ惟

此事のみとして其身の富貴榮華ハ終る之を願はざり
ルウ井ハ父も亦貧賤なり其身ハ至極貧しく其心

ハ甚優ある人にて其遺骸ハ或る富人の傍なる墓地ニ葬
きり此富人ハルウ井の父ニ反し其身ハ富きたまきとも憂
苦心勞して生涯を送りし人あり故ニルウ井ハ好みて其
父の事を語りて樂めり

ルウ井ハ金銀を以て近隣の人ニ交を結ぶことを欲せざ
其身貧しく其又中空しければ其身力を勞し其職事を勤
むるを以て交りし故大ニ衆人ニ敬愛せられり又常に
自謂ふ滿囊の金を懷不せんよりハ郷曲の歡心を得むと
そ甚樂しげきと

ルウ井ハ貧賤なきども其行事斯の如し汝等汝が村中ニ

如何なる富貴の人ありとも此ルウ井より幸福なる人な
りと思ふとちかき

ルウ井ハ眞の幸福の人なり其故ハ絶えて他人の誹謗を
受るを善良有徳として且善心を持ってはかり

善心ハ貧人の良友なきは決して貧人を見捨ることなき

第十三章 父母

父母をして長く此世ニ性命を保ちしめんと敬愛をばし
童子等何事も父母の意ニ承順して事物の自然ニ従ふ如
くまへし

父ハ汝を造りし者なきば父の言ハ聽従をへし又汝が母

の胎内とありし時母の辛苦をみるゝことと扱想ふべし父
母を敬はざる者ハ長く此世に存しむとく父母を敬ふ者
ハ其子の代ふ至りて安樂の日あらん
汝等諸事言行に就き汝が父母を敬親をへし父母の徳ハ
汝に及ぼして常に汝が身は止まれはかり
父母善を積めば子孫家を固くし父母善を積まざれば子
孫家を覆るへし
父母老ゆれば汝よく之を扶くべし汝が幼き時父母の汝
を扶けし如くをへし

若し父母よく病むら或ハ老耄せる時ハ能く之を看護せ

べし汝が身ハ父母に賢れりとも敢て父母を輕蔑するこ
とあられ其故ハ汝が父母のためふせし事ハ父母之を忘
れぬ縦令汝父母のため不幸を受くとも後却りて幸福
を受くる日あらん

第十四章 父

予世の人の父たる者の其兒子に於けぬを見るハ偏ふ之
がため憂苦勤勞して之を扶養し其業を勵みて老い且
衰ふるに至る者あり
其父の云く我兒の幸福あらんとを望む然らば余も亦
幸福あらんと

父は其兒をして聰明英才をらしめんと欲して之を教育
し一科の職業學を研究せしむ是れ他日其職業を以て生
活し衣食不足なからしめんことを願ふなり父の現在
將來となく總て其兒のためを思ふこと此の如し
父は總て己が物を其兒の分子を故に僅に一個の麩包あ
りとも必其兒と與ふ父の子を慈愛せむこと斯の如し嗚
呼子として其父を愛せざるべけんや又其父を敬せざる
べけんや
父猶強壯として余を保護せば固より之を敬愛せべし已
と老いて華髮頭は滿つる時余已に強壯をらば亦益之を

敬愛せべし父子の親への之を樹に隲ふれば幹と小枝との
如し幹は其小枝と樹液と養液と生命とを與ふるものを
り故に其幹を傷く者へ小枝を害し小枝を傷く者へ其幹
を害するを思はざるべけんや
汝等父が子のためは心を盡し事知らんと欲せや茲に
憐むべき一貧人の話あり此人四人の小兒を養ひしは一
家貧苦に逼りて其兒子を食はしむべき麩包なく別の子
子に養ふべき手段もなきは已に生血を賣りて食物を
買ひ與へたり其故に此近隣の學校に醫術を學ぶ諸生あ
り其脩業のためは往きて刺絡せしむる者あれば其賃料

を興ふと云ふ此人一日此校に往き其兩腕を伸して兩度
刺絡を受け其賃料を得て家へ歸り麪包を買ひ其兒子と
與へたり其麪包へ即ち己が生血を以て買ひ求めたるも
のにて此人へ己が苦況の中斯くなして其兒子の飢餓を
救ひたるを幸福とせり父の子を愛むること誠ふ斯の如
し故に人として其父を敬愛せざるは大耻とあらざや又
其父の不幸なるを捨て顧みざる者ハ其身も亦終に不幸
と落ちて慚愧の中苦死をべし

第十五章 母

母ハ九個月の間其子を胎内に持ちて辛勞憂苦し子の世

に生るるに及び又其兒のためは劬勞憔悴を
汝等赤子汝見よ裸體小弱にして唯咻び泣くのみなり之
を養ふ者ハ誰ぞ即ち其母にして之を兩腕の中抱き之
を其胸に當て之に其乳を哺を兒若し眠る時ハ母其傍に
あり兒若し病む時ハ母之を看護す故に母の心ハ其兒の
ためハ慈愛の寶庫なり
童子等汝ハ汝が母の夜も長く起きたるを見ればや全家皆
睡し就きし時獨り汝が母の燈下で紡績裁縫して曾て
止まざ汝が母の斯く勉強して其身の休息を忘るるも皆
其兒のためなり

善き母ハ家の内助をれば汝が母を愛し汝が母を敬して
之を憂せしむることなく其老ゆるま及びてハよく其
老を扶け養ふべし

アンドレーハ善長なる兒ありしが其父を喪ひ獨り母と
居りし時嘗て云ふ今方りて母の助けとらん者ハ獨
り余のこかりとは是より勉めて其業を營み賃料を得る時
ハ喜び歸りて皆之を母と供し他人の游樂宴會へ赴く時
もアンドレーハ其母の傍に侍りて之ハ史傳中の故事を
語り種々の雑話をふして其心を慰藉し時ハ母の左右
に扶持して村中へ徘徊散歩せり人々之を見て皆アンド

レーハ孝順良善なる兒ありと云ひ之を愛敬せざる者を

第十大章 女子ルウ井ズ

ルウ井ズ女ハ温厚な生育せられたれば善長なりて且才
智あり一生幸福安樂の兆著れしが憐むべし二十歳の時
至り通常盛粧鮮服を愛し絲竹宴樂を好む年齢あるに
感然たる不幸に遭遇し其父老衰の餘大に憂勞愁苦を
ことありて終に盲目となれり
是よりルウ井ズハ凡百の事を棄て游樂を斷ち宴會を辭
して盲父を扶持し已に其導者とありて其側を離さず勉

めて其才智と談笑とを以て常之を慰安せり時ありて
其父行歩せんと欲せば余を杖とせよと云ひて其側ふ
傍ひ左扶右持して庭園に徘徊せしめ或は野邊に逍遙せ
しめたり
盲人の見ることを能はざる物ハ總てルウ井ズ之を語りて
其父に知らしめ此所に田野あり豊饒なる收穫あるべし
彼所に花開く小麥あり又穂に出づる燕麥ありと是に因
りて此憐むべき盲父ハ盡く其物を實見せる思をさせり
ルウ井ズハ前より好みて宴會遊樂を爲しよより其慈に
伴ふんとて屢女伴の誘ひ來る者あきども答へて云ふ子

若し出て遊ぶに誰か我父を導き扶げんと遂に之を謝し
て去らしめ再び父の側へ坐し語りながら紡車を轉じ絲
を紡ぎて止めを斯く歲月を送る事他人にありてハ甚憐
むべく見ゆべき也ルウ井ズハ憂色なく只父の意に従ひ
父の志を和らぐるを以て歡喜とし其後父の死去せし時
大に啼泣しく悲哀珠に深かりしと云ふ其後父の死を
シヤツク第十七章
シヤツクの父ハ小商人ありしが其業を精勵して鬼のた
めと勉強正實の鑒とふりたり其後父の死を以て大に
ツヤツクの父久しく病に罹りしとあり此時賈物の價

頓と減じて莫大なる損失を蒙りたるは今の家族の生計も如何と大に之を憂苦せしが償錢の時と至り果して之を償ふこと能はば責債の人少くも宥恕せざ官府と訴へ裁判を請ひ汝をして人牢せしめんと恐喝せり其時家族の景況甚懣むべく小兒ハ泣き叫び母ハ其兒を抱きて涙と咽び大息して俯し居たり

此時ジャックハ已に二十二歳かり是まで父と共に業を營みて積り貯へたる錢財ハ皆此零落して消散したれば如何いせんと思ひしが忽ち自謂へらく余が生命ハ即ち父の與へられたるものなれば父のためには生命を惜ま

ざるこそ道理ありと云ふるも其時ハ父ハ其國に其頃國に戦争ありて軍卒を召募せりジャックハ或る富者の子に代り行きて兵隊の中に入らんと約し其身を捧げて金を受け膺して家へ歸り之を机に置きて父と言ふ我父此金を以て使用し充つべし余ハ今より國王と養はるれば此金を用るべし斯く心を定め父の負債を償ひて家産稍く積り復せんとて父ハジャックの其身軍陣に趣かんとするを聞き其心困感悲傷を覺ゆもジャックハ家屬を慰め我身の戦陣を好むと云ひて暗に其涙を拭ひ鬚鬢を背に負ひて出行きたり然るも天道ハ善く福ひ

とてジャノクハ其後六年の星霜を経て恙なく家へ歸
り肩の肩總を垂せ胸に名譽の十字架を附け武勇の功績
を表して衣錦の榮をなしたれば父ハ其子の無事にして
功を立てしを悦び人は對して常々其子の名譽を誇り語
りしと云ふ金に取らぬ事也
ホーランドマルグリットと云ふ兄妹あり兄ハ十歳妹ハ八
歳とて兩人相親愛して其母ハ事ふること温順なりけれ
は母ハ之を患愛して欣喜堪へば或る時其母病に罹り
床褥に困臥して甚煩悶する也此ポールを驚き憂ひ水藥

第十八章 病母

を持ち來りて母は吞まじめマルグリットハ音響せざる
如く注意して足の先まで静ま歩み兩人共々晝夜怠らば
看病せり一日マルグリットハポールを言ふ母の病ハ危
症なり恐らくハ不起る至らん然れども之を治し得ん者
ハ唯我真神のみなり今予兄と之を真神に祈らんと二人
俱ふ其房に行き拜跪合掌して祈りて曰く嗚呼我真神余
等の母ハ甚善良なれば母の疾病と其煩悶とを救ひ給へ
真神ハ病を治療する良醫なれば我母を健康ならしめ我
母を至快せしめ給ふべしと祈禱終りて母の傍に歸りけ
れば母ハ之を見て微笑し我兄よ我病ハ已に去りて甚快

く既に病床にありと思はば來り余汝を抱んと云ひ小時ありて起立して鬼の房に至り幾許もなく平愈し多れば兩兒ハ喜びて堪へず母を抱きて其側を離れず且眞神の其祈禱の應驗ありしを拜謝せり

第十九章 兄弟の愛

兄弟ハ同根より出たる數幹の如く同幹より出たる數枝の如く又其氣の連ちること恰を十指の如くなれば相和し相愛せざんばある可うらば

汝が兄弟ハ同じ母の胎内より出て同じ母の乳を飲み亦同じ父の兩腕の中へ抱かれし者なり然るは汝若し兄弟

を親愛せざれば世上に何者を以て親愛すべき者とせざるや

余等兄弟の父母の家はありし時其幼時の搖籃ハ互に相近らばや其少しく長きる不及ひてハ一家の内へ並び坐せざや且食卓に同じく列あらばや汝之を思はば豈兄弟と親睦せざることを得んや

子の能く其父母を愛する者ハ亦能く其兄弟姉妹を愛する是れ父母の兒を生みて之を愛育するハ温和慈愛ふし長幼の別なく皆等しければなり故に若し其兒子互に不利として且仇讎の思をあたは其父の痛心憂慮すること

幾何ぞや其母の憂昔悲哀すること亦幾何ぞや人の子たる者念茲よ及はる能く兄弟姉妹と相友愛せざるべけんや
然らば兄弟ハ甚善良ある親友として殊に温和は相愛すべき者ハ姉妹あり固より他はあらざるべし
若し我兄弟姉妹の悲哀する事ある時は余獨り安然と喜ぶべき理あらんや故に其要する所ハ余之を助くべく其乏しき物ハ余之を給ふべし縱令余が所有の物ハ何様微少なりとも之を分つべし豈我門を閉ぢて相入せざるべけん又豈我心を隠して相語らざるべけん

茲は信奉すべき一の古語ありて其誠實あること至れり盡せり即ち協和せれば勢力を成すと云ふ語にて實は數枝集合せば有力者も之を破り得ざらん若し之を分れば一童兒も戯れふ之を折り得ん汝等宜しく此語を服膺せべし

第二十章 兄弟三人

冬月沍寒の候はありて小流ハ已ふ水ハ鎖む平地ハ總て雪は蓋えれ木葉盡く脱し野に飛鳥の聲絶え山となく原となく數里の間隙々たる一色として唯遠樹の處々として現出して白髮老人の子立ざるふ似たりと村落の小屋

より縷々たる竈烟の上るとを見るのみをり良き村人ハ
其冷々たる指を暖めんと爐邊に團樂して窓間より此荒
涼たる景色を望めり

茲にミシエール及カテリーヌと云ふ貧しき夫婦あり甚
だ寒氣の烈しき日困苦せり固より其家ハ頽敗せる故深
く閉づるども風ハ戸隙窓間より吹き入り爐中の火ハ日
と消えて再ひ之を焚んとせしども薪木已に盡きたり側
に幼き三人の兒子あり其性皆温和善良にして相愛ハ長
ハ十歳として名をミシエールと云ひ次のシャルルハ八
歳ホのフレデリックハいまだ六歳を越えざ然るに此憫

むべき小兒等ハ其父母の嚴寒を防ぐこと能ハざるを見
て相語りて云く余等林の中へ往き落木墜葉を拾ひ得て
持ち歸り防寒の具とせんと徒歩して出行き途を埋み徑
を没せる積雪と踏み冒し寒を厭てまして進み暫時まし
て己が家も見えざるまで遠き深林の迂路に入り風又て
折れ散りたる枝葉を拾ひ聚めたり

前章の續き三人の深林にあり
夫の三人の兒子ハ甚遠く行きて枝葉を采拾する間ハ暮
又暁を見えて其家へ還ることの難うらんとを知らざりし
此時三人ハ急ニ其枝束を積み携へて村へ歸らんとし路

を取るとも道路ハ埋没し雪ハ足ニ粘りて木沓甚重く暫
時の間も皆疲勞を極め最幼弱なるフレデリックハ既に
歩むこと能ハざりし其時ハ其母ハ其子ノ聲ヲ聞キ
此困苦の極に至りて何をか爲べき惟三人のみ深林とあ
りて四望せると一點の光明を見ざれば近隣ノ人家あり
とも知られざ大聲ホて呼び叫べども其聲ハ徒々寂寥中
ニ響き大木の返響として四方ニ鳴り渡るのみあり
ミシエールハ止むことを得ざ暫くフレデリックを背ニ
負ひし其重きは堪へざりて地ニ坐し三人相對して泣
き悲しみたり

寒氣烈しくして風ハ其面を刺す如く流るゝ涙ハ頬ニ
凍り手も足も已に凍えて動かざること能はず三人互ニ押
合て坐し居り長子ミシエールも其季弟フレデリック
の冷え凍えたるを憂ひ之を温めんとて心を盡したるも
も遂に温め得べからざるを見て速に己が衣を脱して其
身を寒風ニ曝し其衣を以て季弟を覆ひ且其次弟の苦楚
を思ひて悲哀ノ亦之を勵さんとて種カ心を碎きたり
第二十二章 前章の終

此間父母ハ兒子の歸らざるを痛心し幾度も戸口ニ出て
極目遠望せれども目ヲ遮る者曾て無けりはフレデリック

クよミシエールよシヤールよと屢々其名を呼べども之
と應ずる聲もあく惟平野の陰沈とると數人の吠ゆるを
聞くのみあり

深夜に至りて父母ハ愈心安からざ其家を出て兒子を尋
ねんとすれば數人の村民も亦燈火を携へて爲めり尋ね
んとて出行き竟は此兒子ハ逢ひたり幼兒ハ殆ど凍死せ
んとしシエールは如何よしして之を救ふんとて其衣
を脱して之を覆へども幼兒の回生ハ難きを見て更ニ幼
兒の體の上は横臥し身を以て之を蓋ひ温めて風雪ハ曝
さざらめんとて實ハ隣をべき景況あり

人々此友愛あるを感歎し三兒を抱きて其家ニ歸り大ニ
薪を焚き火を熾して保護すれば暫くして幼兒回生せり
人々之を抱きて其父母の兩腕中ハ渡せば其喜悅實ハ謂
ふべからざ

第二十三章

近隣を愛する事

汝等汝が身を愛する如く汝が近隣の人を愛せよ
人の汝に施して汝欲せざる事ハ汝も亦之を他人に施せ
ことちかれ人の汝に施して汝欲する事ハ汝も亦之を他
人に施せよ

汝が讎敵に至るまで汝之を博愛せよ汝を惡む者あら

ば善を以て之は報じ汝を苦しめ汝を誇る者あらば之が
ためて神を拜まべし然らば汝は天に在り真父の子たる
も恥ぢざるべし此真父は善人悪人の上も太陽を輝か
しめ正人邪人の上も雨露を降らしする者なり
復讐をなすことなかれ亦汝が受けし辱を回想するこ
となかれ

人の過失は汝之を宥恕せよ是れ汝が過失は人の宥恕
せんが爲めなり
汝人に對して怨心を含む時其神の汝を憫まむことを
願ふとも得べしや又人に對して復讐の念を懐く時ハ

真神の汝を宥恕せんことを望むとも得べしや
人の余を處する如く余も亦他人を處せよと謂ふべから
ざり又各人の余に對して施を所業と從ひて余も亦之を各
人に施さんと謂ふべからざり
悪く報ざるは惡を以てせむることなかれ凌辱小報を以
て惡く報ざるは惡を以てせむることなかれ凌辱小報を以
て惡く報ざるは惡を以てせむることなかれ凌辱小報を以
て惡く報ざるは惡を以てせむることなかれ凌辱小報を以

總て余輩の父は同一なり如何とせば同一の真神同一
の泥土を以て余輩を創造して形を賦し命を興ふ故に余
輩は悉く皆一大親族なり

余輩の運命ハ皆同一かり同じ地球の上ニ住居し同じ地球の物を飲食し等しき生を得亦等しき死をふ故ニ其患苦ハ固より彼我の別なく他人の困苦を見てモ亦余輩をして涕泣せしむ

第二十四章

仁恵

汝が財貨を施して貧者を斥け遠ざくると云ふかれ斯の如くせば汝ハ真神の恵を得て真神汝を愛憐まべし貧を恤み急を救ふハ凡て汝が所有物ニ従ふべし汝若く多く有せば人と與ふるも亦多かるべし汝若く少く有せば人と與ふるも亦少かるべし人を救恤するもハ只

良心を以てするを善しといふ斯の如くせば汝が財貨の必要ある時容易く之を集むることを得べし如何とされば真神ハ汝が恩恵の所行を見て汝が後來を思へばかり貧を恤み急を救ふハ真神ニ貨財を貸せし同じ真神必其負債を償ふべし汝不幸の人を見て其鬱胸を清凉せんとして之唯一玻璃盞の水を興ふるとも汝彼を憐む誠心より出てば此一事として人と賞譽せらるべし

飢者ニハ汝が麪包を分與せべし寒者ニハ汝が衣服を給施せべし汝若し穀を收穫せば汝が手より落ちたる遺穂

ハ之を顧ふ拾ふととなく孤兒寡婦等窮人をして之を拾ひ得しむべく是の如くせば眞神ハ汝が諸業ニ幸福を降さべし

艱難をる者ハよく憐れを垂れて汝が身の艱難をるが如くさべし貧者を恵む人ハ其身富貴とかり窮人を顧ざる者ハ其身も亦次第ニ不幸に至るべし

貧者の悲叫を聞きて感歎せざる者ハ眞ニ不幸なる者也他日己が悲み叫ぶ事あらん時ハ人亦之を聞きて憫まざるべし

汝他人を恤まば人も亦汝を恤まん汝善く他人を遇せば

人も亦善く汝を遇せん

第二十五章 孤子

貧者マルセルの家ニ一の不幸到りて其婦を喪ひ其身も次で泉下の客とされり此人ハ一の勇夫なるよりて近隣皆其死を悲傷せり然るニ孤子二人あり幼弱として更ニ親族なく且百物缺乏して實ニ憫むべき景況なりマルセルの近傍ニロベールと云ふ人あり家ニ富まざれども其兩腕を勞して家業を管み三人の兒子を養ふ一日ロベール其婦を謀りて云く子彼のマルセルの孤兒が傷むべき状を思ひ此兒の如何ニ成長せんかと考ふる時ハ

我愁腸實寸斷せんと以子之を我家に取てて養育せんと欲せしが家貧しく累多し然れども子之を棄るゝ忍びざると其婦答へて子に家眷を思はざや余等三兒を養ふも已に甚勞苦かり如何して五兒を養ふことを得んと云ふ
ロベール再び云く然らば余等の艱苦は猶少からし余等一斤の麩包を食むると當り其四分の三を食ひて其餘の之を孤兒に分らん斯の如くせば善良なる眞神必其闕を補ふ物を賜はるべし汝原野は多く諸鳥の居るを見よ是れ眞神の窮人をして餬口の術を補はしめんが爲めは養ひ置くものなりと

是より出でて二人の孤兒を尋ね其困苦の狀を思ひ感涙を流して己が家へ携へ歸り之を養育すること己が子と異ならざ之を慈愛して常ふ我子と呼びたり
ロベールは日々節儉を事とし醒醒して困苦の生活をせしが歳月を積みて二孤已に成長し各手業を営みて精勵の工夫とあり週日の終り毎に其日課の賃料を得て之を持ち歸りロベールと呈せる故に貧しきロベール暴に富有の身となりて眞神の聖徳を拜祝せると至きり

第二十六章

ジュリアン

ミレエルの葡萄を以て生を營みしが其培養の時に至り

病に罹りて地を掘り日光雨露を受けしむべき業を作
こと能はざ故に收穫の時に至らば其望も失はんとて
殊に愁ふきども其病久しく愈えざれば朝夕焦慮せり其
隣にジュリアンと云ふ者あり此人自謂へらく他人の爲
めしせざる者幾他人も亦己が爲めにせざ今より二時早
く起き一時遅く寝終てよく其勞を堪へば余ミシユルに
代りて工業を作さんと欲得べしと

是よりミシユルに告げせしめて朝より夕に至り時として
ハ月光の下よて其業を勵みたり斯て十二日の末に至り
ばミシユルの葡萄樹ハ好き模様となり其實の暫時の肥

之且増加する其見たりミシユルハ病漸く回復し赴き一
日天氣晴朗なるに因り衰を扶けて其葡萄園を見んと欲
して出でたり久しく病床に臥して棄置きし故定めて流
燕あらんと思ひしに豈料らん其地ハ清美にしてよく耕
し其幹ハ茂刈し小援を以て之を支へ葡萄の房ハ蕃茂し
てあらんとハ

此時ミシユルハ始めてジュリアンの所爲をるところを知
り深く其恩を感じ強くジュリアンの手を握りて約して
云く以後ハジュリアンに非ざして誰れ誠意を以て相交
るべきものあらんと懇し其惠を拜謝せしむばジュリアン